

# とりたて詞のカートグラフィー

田中 秀和\*

## はじめに

とりたて詞とは、伝統的には副助詞ないしは係助詞と呼ばれ、「も」「は」「なら」「だけ」「しか」「ばかり」「こそ」「さえ」「まで」「でも」「だって」「なんか」「なんて」「など」「くらい」など数多くの助詞がこの範疇に入る(日本語記述文法研究会(2009))。本稿はTanaka(1997)で提案されている交差制約を手掛かりに、複数のとりたて詞が単一文に複数現れる場合に観察される共起制限を精査し、とりたて詞が多重に階層をなす機能範疇によって認可されることを論じる。また、この階層的な機能範疇がCP-TPを境に二つのグループに分けられること、とりたて詞と機能範疇の関係は一対一対応ではなく、単一の機能範疇が異なるとりたて詞の認可に関与すること、一般にはとりたて詞と見なされていないwh疑問詞や感嘆文などもとりたて詞と同様の振る舞いをするを論じる。

## 1. 交差制約

### 1.1. 「しか-ない」とwh疑問文

「しか-ない」構文に関してはMuraki(1978)を起点とする多くの研究がある。Takahashi(1990)やMaki(1994)は「しか-ない」とwh疑問文の共起制限を報告している。本節では、Tanaka(1997)の交差制約をまとめ、本稿の理論的基盤を築く。交差制約とは「しか-ない」や「何を-の」のように呼応の対極にある表現を線で結び、二つの線が交差すると文法性が落ちる、というものである。これにより、以下の対比が説明される。

- (1) ?? 太郎しか 何を 読まなかったの?

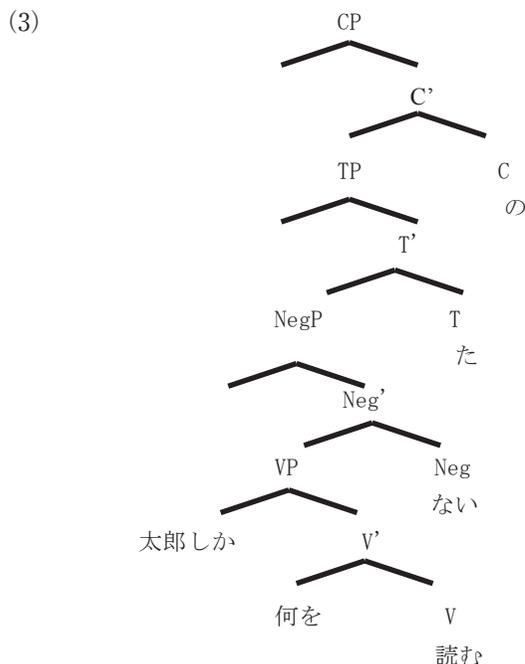


- (2) 何を<sub>i</sub> 太郎しか t<sub>i</sub> 読まなかったの?



\*岡山大学大学院社会文化科学研究科准教授

Tanaka (1997) では、否定詞「ない」をNegPの主要部、疑問の終助詞「の」をCPの主要部と仮定して、階層的な説明を試みた。「ない」や「の」の主要部は、形態的に「動詞-ない-時制-の」の語序で出現する。主要部後置型言語である日本語では(3)のように階層的にCPが時制のT (ense) Pより上位、TensePはNegPより上位、NegPはVPより上位にあることになる。



要するに(2)のように文法的な文の語順(wh疑問詞が「しか」に先行)がそのまま句構造の階層構造(CPがNegPを支配)に反映される。換言すれば、容認度が低い(1)はCPがNegPより低いという階層関係が線形順序に反映されてないことになる。もしとりたて詞も交差制約に従うのなら、とりたて詞の語順を調べるにより、それぞれのとりたて詞がどの位置にある機能範疇にし、どのような階層関係を織り成すのかを決定することができることになる。本稿の第一の目的はそこにある。

## 2. とりたて詞に見られる共起制限

本節では複数のとりたて詞が共起する場合に観察される制限を精査し、その階層順序を決定する。

### 2.1.こそ

伝統的に係助詞と呼ばれている「こそ」について考察しよう。古語では「こそ」は已然形の結びを要求していた。現代語には顕著な結びがないが、「こそ」は交差制約には従い、wh句の「何」に先行しなくてはならない。

- (4) 太郎こそ何を読んだの?  
 (5) ??何を<sub>i</sub> 太郎こそ<sub>t<sub>i</sub></sub> 読んだの?

よって、「こそ」を認可する昨日範疇をKosoPと呼ぶとすると、KosoPはCPより高い位置にあることになる。

(6) KosoP > CP > NegP

また前節の帰結としてCPはNegPより高い位置にあるので、「こそ」は「しか」に先行しなくてはならないことになる。この予測が正しいことは(7)と(8)の対比から見て取れる。

(7) 太郎こそLGBしか読まない。

(8) ??LGBしか<sub>i</sub> 太郎こそ t<sub>i</sub> 読まない。

現代日本語の「こそ」が文末に現れる空の機能範疇と呼応しているという仮説は、現代語では消失したとされる係り結びが、実は形を変えて生き残っているという見方を可能にするものである。

## 2.2. も

「も」に関する議論は長谷川 (1994) に見られる。長谷川はCPのすぐ下にPoIPという機能範疇を設け、それが「も」の認可に関与しているとしている。ここでは説明の便宜上、当該の機能範疇(長谷川のPoIP)をMoPと呼ぼう。長谷川の指摘するように、以下の対比はMoPがCPより下にあるため、wh句に先行できないことを示している。

(9) 誰がLGBも読みますか

(10) ??LGBも<sub>i</sub> 誰が t<sub>i</sub> 読みますか?

MoPはNegPよりも高い位置にある。

(11) 太郎もLGBしか読まない。

(12) ??LGBも<sub>i</sub> 太郎しか t<sub>i</sub> 読まない。

よって(13)の階層関係が正しいことになる。

(13) KosoP > CP > MoP > NegP

## 2.3. さえ

次に「さえ」の振る舞いを観察しよう。「さえ」はwh句より右側に現れなくてはならない。

(14) 誰がLGBさえ読みますか?

(15) ??LGBさえ<sub>i</sub> 誰が t<sub>i</sub> 読みますか?

よって、「さえ」を認可する主要部はCPより低い位置にあることになる。

(16) CP > SaeP

すでにKosoPはCPより高い位置にあることが判明しているので、KosoPがSaePよりも階層的に上位にあることになる。実際に、以下の対比は「こそ」が「さえ」に先行する、すなわち、KosoPはSaePより上位にあることを示している。

(17) 太郎こそLGBさえ読みました。

(18) ??LGBさえ<sub>i</sub> 太郎こそ t<sub>i</sub> 読みました。

では、「さえ」はCPより下のとりたて詞に対してはどのように振る舞うのであろうか? (13)で

はCPの下にはMoPがある。以下の対比はSaePはMoPよりも上位にあることを示している。

(19) 太郎さえLGBも読みました。

(20) ??LGBも<sub>i</sub> 太郎さえ<sub>i</sub> 読みました。

よって、これまでの機能範疇の階層関係は以下の通りになる。

(21) KosoP> CP> SaeP>MoP>NegP

(21)が予測する通り、「さえ」は「しか」に先行しなくてはならない。SaePがNegPより上位だからである。

(22) 太郎さえLGBしか読まない。

(23) ??LGBしか<sub>i</sub> 太郎さえ<sub>i</sub> 読まない。

#### 2. 4. なんて

とりたてて詞としての「なんて」はwh句に先行しなくてはならない。よって「なんて」を認可するNantePはCPより階層的に高い位置にあることになる。

(24) 太郎なんて 何を 読むの？

(25) ??何を<sub>i</sub> 太郎なんて<sub>i</sub> 読むの？

(26) NanteP>CP

「なんて」は「こそ」に先行する。

(27) 太郎なんてLGBこそ読んだ

(28) ??LGBこそ<sub>i</sub> 太郎なんて<sub>i</sub> 読んだ

よって、NantePはKosoPよりもさらに上位にあることになる。

(29) NanteP>KosoP> CP> SaeP>MoP>NegP

この階層性が予測する通り、前節まで論じた「さえ」、「も」、「しか」は「なんて」に先行できない。

(30) 太郎なんてLGBさえ読んだ。

(31) ??LGBさえ<sub>i</sub> 太郎なんて<sub>i</sub> 読んだ。

(32) 太郎なんてLGBも読んだ。

(33) ??LGBも<sub>i</sub> 太郎なんて<sub>i</sub> 読んだ。

(34) 太郎なんてLGBしか読まない。

(35) ??LGBしか<sub>i</sub> 太郎なんて<sub>i</sub> 読まない。

#### 2. 5. なんか

「なんか」は平常文中では不自然だが、否定文か疑問文では自然な文になる。

(36) \*太郎なんか LGBを 読む。

(37) 太郎なんか LGBを 読まない。

(38) 太郎なんか LGBを 読むの？

「なんか」はwhに先行する。この事実はNankaPがCPよりも上位であることを示している。

(39) 太郎なんか 何を 読むの？

(40) ??何を<sub>i</sub> 太郎なんか t<sub>i</sub> 読むの？

(41) NankaP>CP

一方で、前節の「なんて」には先行できず、NankaPはNantePより低いことになる。

(42) 今時の学生なんて LGBなんか 読まない。

(43) ??LGBなんか<sub>i</sub> 今時の学生なんて t<sub>i</sub> 読まない。

(44) NanteP>NankaP>CP

「なんか」は「こそ」よりも左に現れるので、NankaPはKosoPより高いということになる。

(45) 太郎なんかLGBこそ 読まない。

(46) ??LGBこそ<sub>i</sub> 太郎なんか t<sub>i</sub> 読まない。

よって、ここまでの結論として(47)の階層関係が想定される。

(47) NanteP>NankaP>KosoP>CP>SaeP>MoP>NegP

## 2.6. だって

「だって」はwh疑問詞に先行できない。CPよりも下の機能範疇に認可されることになる。

(48) ??太郎だって何を読むの？。

(49) 何を<sub>i</sub> 太郎だって t<sub>i</sub> 読むの？

(47)の階層関係において、CPのすぐ下にあるSaePに対しては、「さえ」が「だって」に先行することから、SaeP>DattePであるということになる。

(50) 太郎さえ LGBだって 読む。

(51) ??LGBだって<sub>i</sub> 太郎さえ t<sub>i</sub> 読む。

MoPに対しては、「だって」は「も」に先行しなくてはならないことから、「だって」を認可する機能範疇(DatteP)がMoPより高い位置にあることになる。

(52) 太郎だって LGBも 読む。

(53) ??LGBも<sub>i</sub> 太郎だって t<sub>i</sub> 読む。

よって、DattePはCPとMoPの間にあることになる。

(54) NanteP>NankaP>KosoP>CP>SaeP>DatteP>MoP>NegP

この階層が予測する通り、だっでは「しか」に対しては先行しなくてはならない。

(55) 太郎だって LGBしか 読まない。

(56) ??LGBしか<sub>i</sub> 太郎だって t<sub>i</sub> 読まない。

逆により上位にあるNantePに対しては、「なんて」が「だって」に先行できないことから、(54)の階層関係が正しいことがうかがえる。

(57) ??太郎だって LGBなんて 読む。

(58) LGBなんて<sub>i</sub> 太郎だって t<sub>i</sub> 読む。

(54)の予測する通り、「だって」は「なんか」、「こそ」などに対しても同様に先行できない。

(59) ??太郎だって LGBなんか 読まない。

(60) LGBなんか<sub>i</sub> 太郎だって t<sub>i</sub> 読まない。

(61) ??太郎だって LGBこそ読む。

(62) LGBこそ<sub>i</sub> 太郎だって t<sub>i</sub> 読む。

以上の議論から、(54)の階層関係は経験的に妥当であることが伺える。ここでひとまず、これ以上のとりたて詞を導入することを止めて、この分析の持つ意味合いを考察したい。

### 3. 句構造ととりたて詞

前節では(54)の階層性について論じた。交差制約以外に他に階層性を設定する証拠があるのか、また、それぞれのとりたて詞に対して専用の機能範疇を設定することに正当性はあるのだろうか？本節ではこれら二つの疑問について考察する。前者の疑問に関して、日本語の関係節内に生起するとりたて詞と、wh疑問詞に付くとりたて詞の振る舞いから、とりたて詞はCPより上位のNanteP>NankaP>KosoPのグループとCPより下位のSaeP>DatteP>MoP>NegPのグループに分けられることを示す。後者の疑問に関して、幾つかの機能範疇は他のとりたて詞、ないしはそれに準ずる助詞を認可することを示し、それぞれのとりたて詞に一对一対応で専用の機能範疇があるのではないことを示す。

#### 3.1. 関係節の統語構造

英語の関係節では補文標識があること、また関係節内でwh移動があることから、一般的にCPであると認識されている。

(63) the man [ <sub>CP</sub> that read LGB ]

(64) the man [ <sub>CP</sub> who read LGB ]

一方で、日本語の関係節には「と・か・の」などの補文標識が出てこれない。

(65) [ 図書館でLGBを読む ]人

(66) [ 図書館でLGBを読んだ ]人

(67) \*[ 図書館でLGBを読んだと ]人

(68) \*[ 図書館でLGBを読んだか ]人

(69) \*[ 図書館でLGBを読んだの ]人

現在時制の(65)、過去時制の(66)があるので、少なくとも関係節はTPかそれより大きい範疇であると考えられる。Murasugi (1991)は日本語の関係節はTPであるとしている。一方で、時制のTPは(3)で示したようにCPとNegPの間にあるのだが、(54)の階層構造ではCPとNegPの間にSaePとDattePとMoPが介在している。もし、関係節がTPであり、「も」や「だって」も関係節の中に生起可能ならば、関係節、すなわちTPはSaePより階層的に上位にあることになる。実際、これらのとりたて詞は関係節内に生起可能である。

(70) [ 図書館でLGBも読む ]人(が)いる)

(71) [ 図書館でLGBだって読む ]人(が)いる)

(72) [ 図書館でLGBさえ読む ]人(が)いる)

よってTPはCPとSaePの間に置くことができる。

(73) NanteP>NankaP>KosoP>CP>TP>SaeP>DatteP>MoP>NegP

関係節がTPまでであるとすると、それより下位の「しか」も関係節内に生起可能なはずである。

(74) [図書館でLGBしか読まない]人(が)いる

逆にTPよりも上位にあるとりたて詞は関係節内に生起不可能であることが予測される。

(75) \*[図書館でLGBなんて読む]人(が)いる

(76) \*[図書館でLGBなんか読む]人(が)いる

(77) \*[図書館でLGBこそ読む]人(が)いる

まとめると、とりたて詞にも関係節内に生起可能なもの((70)-(72))及び(74)と、生起可能なもの((75)-(77))があり、その違いが本稿で主張する階層関係で説明可能なことを見た。

ここで(73)の階層構造を今一度、考察してみたい。この構造にはCPより上位にある機能範疇NanteP>NankaP>KosoP>CPとTPより下位にある機能範疇(SaeP>DatteP>MoP>NegP)に分けられる。Chomsky (2001)に慣い、前者の類をCP-Edge系、後者の類はvP-Edge系と呼ぼう。CP-Edge系についてはRizzi (1997)を起点とする一連のカートグラフィーの研究と密接な関係がある。カートグラフィーとは句構造の普遍性を認め、より具体的には伝統的なCPという機能範疇がいくつもの別々の機能範疇からなると考えるものである。本稿での結果は、カートグラフィーを支持するものであると同時に、vP-Edge系の存在からわかることは、TPとVPの間にも多くの機能範疇が必要であるということである。刺激の欠乏の問題から、これらの機能範疇は普遍文法の表れだと考えられる。すなわち、これらの機能範疇の階層関係を経験から学ぶということはあるえないので、何らかの意味で(73)の階層関係は生得的なはずである。ここで問題となるのが、Rizzi (1997)に代表される一連の研究にはFocPなどの機能範疇は想定されるが、焦点化が関与していると思われる多数のとりたて詞が(73)のような階層をなしているという考えは主流ではないということである。例えば、Rizzi (2004)では以下のような階層を想定している。

(78) ForceP>TopP>InterrogativeP>TopP>FocusP>ModalP>TopP>FinP>IP

とりたて詞は機能的には焦点化、すなわちフォーカスであるが、(78)には一箇所しか想定されておらず、かつIPより下にFocusPがあるのかは不明である。(73)の階層がもし普遍的であるのならば、他の言語にも見出されて当然である、もし他の言語には(73)の階層がないのならば、それが何故なのか、どのようなパラメータと相関して日本語には(73)があるのか、広範にわたる調査をする必要が出てくる。これらの課題については将来的な研究に委ねることにする。

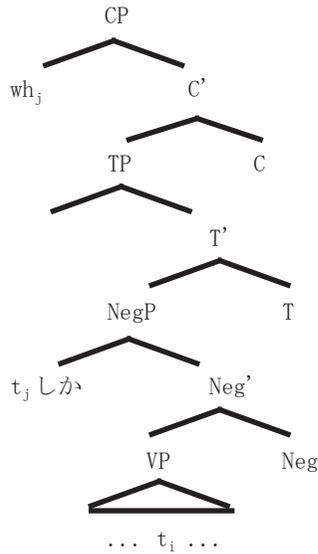
### 3.2. wh疑問詞ととりたて詞

前節ではとりたて詞に関係節の中に現れうるものと、そうでないものがあり、その区別がTP内で認可されるvP-Edge系のとりたて詞か、CPより上位のCP-edge系のとりたて詞か、という区分で説明できることを見た。本節ではとりたて詞を二分することにより、また別の言語現象も説明できることを示す。以下の例を観察されたい。

(79) 太郎が何しか読まないの？

(79) においては、wh疑問詞に「しか」がついている。意味解釈部門において「whしか」全体がNegPの指定部に上がり、whの部分はCPの指定部に上がるとしよう (Tanaka (1997))。

(80)



この表示においてはwh<sub>j</sub>がNegPの指定部に移動した「しか」内にある自らの痕跡をC統御する。Fiengo (1977) のProper Binding Conditionは (81) にあるが、痕跡はその先行詞にC統御されなくてはならない。

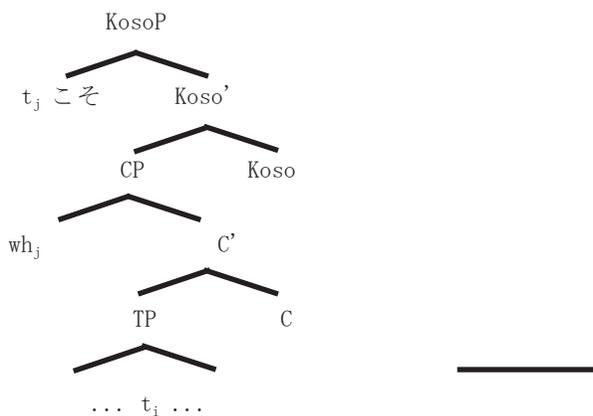
(81) Proper Binding Condition (PBC): Traces must be bound.

(80)の表示はPBCに従う。一方で、whにCP-edge系のとりたて詞「こそ」がついた(82)を考えてみよう。

(82) \*太郎が何こそ読んだの？

(79)に比して(82)は文法性が落ちる。wh疑問詞はCPの指定部、「こそ」はKosoPの指定部に移動するという仮定で(82)がどのように表示されるかを考えてみよう。(82)は(83)のように表示されることになる。(82)は以下のような表示になる。

(83)



ここで、wh<sub>j</sub>はKosoPの指定部に繰り上げられた自らの痕跡t<sub>j</sub>をC統御しないので、(82)/(83)は

PBC違反ということになる。すなわち、一般的にCP-edge系のとりたて詞がwh疑問詞に付くとPBC違反になるのに対して、vP-Edge系のとりたて詞はwh疑問詞に付くことができることになる。以下の例はこの一般化が正しいことを示している。

- (84) \*太郎が何なんて読んだの？  
 (85) \*太郎が何なんか読んだの？  
 (86) 太郎が何さえ読んだの？  
 (87) 太郎が何だって読んだの？  
 (88) 太郎が何も読んだの？

本節では、前節で見たとりたて詞をTPを挟んでCP-Edge系とvP-Edge系に分けることが別の言語事象からも必要とされる仮説であることを見た。関係節に現れうるか、wh疑問詞につけるかどうかという、一見無関係な二つの言語事象に対して自然な説明が与えられることからして、とりたて詞が階層をなし、また、CPとTPを間に挟んで二つに区分されるという主張が真理の一面を捉えていると思われる。

### 3.3. 「まで」と「こそ」

ここまでの議論にそれぞれのとりたて詞に対して専用の機能範疇があるかのような印象を受けるかもしれない。本節ではとりたて詞「まで」を取り上げ、「まで」が「こそ」と同じ機能範疇(KosoP)に認可されることを論じる。「まで」は多くの場合、平常文で使われる。

- (89) 太郎がLGBまで読む。

もし「まで」がKosoPで認可されるとすると、KosoPのすぐ上位は「なんか」なので、「まで」は「なんか」に先行できないことになる。以下の対比はこの予測が正しいことを示している。

- (90) 太郎なんかLGBまで読む。  
 (91) ??LGBまで<sub>i</sub> 太郎なんか<sub>t<sub>i</sub></sub> 読む。

KosoPのすぐ下位にはCPがある。「まで」はwh疑問詞に先行しなくてはならない。

- (92) ??誰が LGBまで 読むの？  
 (93) LGBまで<sub>i</sub> 誰が<sub>t<sub>i</sub></sub> 読むの？

よって、「まで」はNankaPとCPの間にある機能範疇で認可されることになる。そうした場合、上での議論では「こそ」と「まで」の順序が問題になった。実際にはこの二つのとりたて詞は順序に関係なく共起不可能である。

- (94) \*太郎まで LGBこそ 読む。  
 (95) \*LGBこそ<sub>i</sub> 太郎まで<sub>t<sub>i</sub></sub> 読む。

この事実はKosoPはとりたて詞を認可できないと考えれば自動的に説明される事象である。実際に、「こそ」も「まで」も単一文中に複数出てくることはできない。

- (96) \*太郎こそLGBこそ読む。  
 (97) \*太郎までLGBまで読む。

同様に、「しか」と「何も」のような異なる種類の否定辞対極表現は単一文中に共起できない。こ

れは(94)-(95)と同じ現象であると考えられる。<sup>1</sup>

(98) \*太郎しか何も読まない。

(99) \*何も<sub>i</sub> 太郎しか<sub>t<sub>i</sub></sub> 読まない。

よって、否定辞対極表現が否定辞(Neg)に対して持つのと同じ関係が、「こそ」「まで」とKosoPの主要部の間にあると考えられる。この事実は、「こそ」と「まで」が同一の主要部Kosoに認可されるとすれば説明できる。

### 3. 4. 感嘆文

本節では日英語の感嘆文を扱う<sup>2</sup>。日本語の典型的な感嘆文は以下のようなものである。

(100) なんて沢山の人がLGBを 読んでいるんだろう!

(101) 太郎は なんて難しい本を 読んでるんだろう!

感嘆文は否定辞対極表現と似た性質を持つ。否定辞対極表現が埋め込み文内にある時、否定辞は主節に現れることはできない。

(102) ??花子は [ 太郎がLGBしか 読んでいると ] 言わなかった。

だが、(102)の否定辞対極表現がかき混ぜにより埋め込み文のエッジに現れた場合、容認性は高くなる(Yamashita (2003))。

(103) 花子は [ LGBしか<sub>i</sub> 太郎が<sub>t<sub>i</sub></sub> 読んでいると ] 言わなかった。

また、長距離かき混ぜによって(102)の否定辞対極表現が文頭に移動された場合も同様、容認性が上がる。

(104) LGBしか<sub>i</sub> 花子は [ 太郎が<sub>t<sub>i</sub></sub> 読んでいると ] 言わなかった。

同様の現象が感嘆文でも観察できる。すなわち、(102)と同様に「なんて」が付加する句は感嘆の「んだろう」の間に節境界があってはならない。

(105) ??花子は [ 太郎が なんて難しい本を 読んでいると ] 言うんだろう!

しかし、埋め込み文のエッジや文頭に「なんて」が動いた場合、(103)/(104)と同様、容認度が高い文になる。

(106) 花子は [ なんて難しい本を<sub>i</sub> 太郎が<sub>t<sub>i</sub></sub> 読んでいると ] 言うんだろう!

(107) なんて難しい本を<sub>i</sub> 花子は [ 太郎が<sub>t<sub>i</sub></sub> 読んでいると ] 言うんだろう!

よって、感嘆の「なんて」もとりたて詞と同様の振る舞いをするのが予想される。それでは(73)

---

1 「しか」は単一文に複数生起できない。

(i) \*太郎しかLGBしか読まない。

一方、「whも」の否定辞対極表現は複数共起可能である。

(ii) 誰も何も読まない。

とりたて詞の持つこうした性質についてここでは触れないことにする。

2 ここでの議論と少し異なる分析についてはOno, Hajime. 2006. An investigation of exclamatives in English and Japanese: Syntax and sentence processing, Department of Linguistics, University of Maryland.を参照されたい。Onoの分析に関する詳細な検討は稿を改めて行う。なお、ここでの議論は岡山大学文学部学生、岩田比奈の卒業論文に着想のヒントを得ている。記して感謝したい。

の階層内のどこに感嘆の「なんて」はあるのだろうか？

(108) NanteP>NankaP>KosoP>CP>TP>SaeP>DatteP>MoP>NegP

(109)/(110)の対比は感嘆の「なんて」がNegPより高いことを示している。

(109) なんて沢山の人が LGBしか 読まないだろう!

(110) ??LGBしか<sub>i</sub> なんて沢山の人が t<sub>i</sub> 読まないだろう!

感嘆の「なんて」は「さえ」にも先行する。よってSaePよりも高い機能範疇が感嘆の「なんて」の認可に関与していることになる。

(111) なんて沢山の人が LGBさえ 読むんだらう!

(112) ??LGBさえ<sub>i</sub> なんて沢山の人が t<sub>i</sub> 読むんだらう!

感嘆の「何て」は「こそ」に先行できない。よって、KosoPとSaePの間の機能範疇が関与していることになる。

(113) ??なんて沢山の人が LGBこそ 読むんだらう!

(114) LGBこそ<sub>i</sub> なんて沢山の人が t<sub>i</sub> 読むんだらう!

KosoPとSaePの間にはCPがある。想定される可能性としては感嘆の「なんて」はCPより高い、ないしは低い機能範疇に認可されるか、もしくはwh疑問詞と同様、簡単な「なんて」の認可にもCPが関与していることが考えられる。ここでは後者の可能性が正しいことを論じる。wh疑問詞と感嘆の「何て」は語順に関係なく単一文句中に共起できない。

(115) \*なんて沢山の人が 何を 読むんだらうか!?

(116) \*何を<sub>i</sub> なんて沢山の人が t<sub>i</sub> 読むんだらうか!?

これは前節の「さえ」と「まで」が共起できない(94)-(95)、また二種類の否定辞対極表現が共起できない(98)-(99)と同様の現象であると考えられる。すなわち、感嘆の「何て」はwh疑問詞と同様にCPで認可されるが、この二つが同時に同じCPに認可されることはないと考えられる。

#### 4. まとめ

本稿では日本語学でとりたて詞と呼ばれる焦点化副助詞とwh疑問詞、感嘆の「なんて」などを精査し、それらが節構造のどの位置の機能範疇に呼応するのかを特定した。結果としては機能範疇の階層関係は以下の通りである。

(117) NanteP>NankaP>KosoP>CP>TP>SaeP>DatteP>MoP>NegP

このうち、KosoPは「こそ」だけでなく「まで」も、またCPはwh疑問詞だけでなく、感嘆の「なんて」も認可することを示した。

本稿が取りこぼした問題、本論の結論から出てくる疑問は沢山ある。日本語の歴史から見ると、「ぞ、なむ、や、か」などの係助詞は連体形を要求していた。

(118) その煙、いまだ雲の中へ立ちのぼるとぞ言ひ伝へたる (竹取物語)

連体形結びとは、連体形の後ろには音形のない名詞があり、それが連体形を要求していたと考えられる。すなわち、本稿の3.1節で考察した関係節と同等の構造を有していたと考えられる。この点で已然形を要求した「こそ」とは異なり、「ぞ、なむ、や、か」などの文中用法と係り結

びは消失したが、「こそ」には現代語に文中用法が残っていることは偶然ではないと考えられる。また、関係節と同等の構造内に現れるということは、「ぞ、なむ、や、か」は本稿で言うところのvP-edge系の助詞ということになる。すると、古語において「ぞ、なむ、や、か」が「こそ」と共起できるのか、できるのなら語順はどうなるのか、という疑問が湧いてくる。本稿の予測としては「こそ」は「ぞ、なむ、や、か」に先行することになる。これは正しいのだろうか？

また、係助詞を始めとする副助詞の幾つかには文末用法がある。

(119) 東京に行くなんて。

文末用法は古語の係助詞も現代語に残って存在している。

(120) 東京に行くぞ！

文末用法は統語的にはどこにつくのだろうか？

さらに3.1節でも触れたように、ヨーロッパの言語を基にしたRizzi (2004) の提案する階層構造と本稿の主張はかなり異なるものになっている。なぜなのだろうか？一つ考えられるのは、本稿の主張する階層構造は主要部後置型の言語に見られる特徴なのではないか、ということである。英語、イタリア語などの主要部前置型の言語では主に移動により作用域が決定される。逆に、主要部後置型言語は移動で作用域を決定しない（いわゆる、Bach (1971) の一般化）。トルコ語や韓国語など、言語類型論的に日本語と似通った言語にも日本語と同様の階層構造があるのだろうか？本稿はこうした多くの問題を残す。

#### <参考文献>

- Bach, Emmon. 1971. Questions. *Linguistic Inquiry* 2:153-166.
- Chomsky, Noam. 2001. Derivation by phase. In *Ken Hale: A life in language*, ed. Michael Kenstowicz, 1-52. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Fiengo, Robert. 1977. On trace theory. *Linguistic Inquiry* 8:35-62.
- Maki, Hideki. 1994. Interaction of negative polarity items and wh-phrases: an argument for the linear crossing constraint. Ms. Storrs.
- Muraki, Masatake. 1978. The sika nai construction and predicate restructuring. In *Problems in Japanese Syntax and Semantics*, ed. John Hinds and Irwin Howard, 155-177. Tokyo: Kaitakusha.
- Murasugi, Keiko. 1991. Noun phrases in Japanese and English: A study in syntax, learnability and acquisition. Department of Linguistics, University of Connecticut.
- Ono, Hajime. 2006. An investigation of exclamatives in English and Japanese: Syntax and sentence processing. Department of Linguistics, University of Maryland.
- Rizzi, Luigi. 1997. The fine structure of the left periphery. In *Elements of grammar*, ed. Liliane Haegeman, 281-337. Dordrecht: Kluwer.
- Rizzi, Luigi. 2004. Locality and left periphery. In *Structures and beyond: cartography of syntactic structures*, ed. Adriana Belletti, 104-131. Oxford: Oxford University Press.
- Takahashi, Daiko. 1990. Negative polarity, phrase structure, and the ECP. *English Linguistics* 7:129-146.
- Tanaka, Hidekazu. 1997. Invisible operator movement in sika-nai and the linear crossing constraint. *Journal of East Asian Linguistics* 6:143-188.
- Yamashita, Hideaki. 2003. On the distribution and licensing of negative polarity items in Japanese and the phase-impenetrability condition. In *Forth Tokyo Conference on Psycholinguistics*, ed. Yukio Otsu. Keio University: Hitsuji Shoboo.

- 長谷川, 信子. 1994. Wh-疑問文、否定対極表現のしか、とalsoのも. Ms., 第3回南山大学日本語教育・日本語学国際シンポジウム報告書.
- 日本語記述文法研究会. 2009. 現代日本語文法5第9部とりたて. 東京: くろしお出版.